

縄文農耕から擦文農耕へ
—北海道における原始農耕探査の現場から—

吉崎 昌一

鎌木義昌先生古稀記念論文集刊行会

1988年12月18日

縄文農耕から擦文農耕へ

—北海道における原始農耕探査の現場から—

吉崎 昌一

I 化外の地 北海道 : 緒言にかえて

文字による歴史資料が入手できるようになった古代末期以降においても、北海道の原住民は文字による記録を持たなかった。また、この地に関する文字歴史資料が増加する中世末～近代にかけても、それらはいわゆる和人の手になるものであって、あくまでも和人の立場から記録されたものが殆どである。これを駆使して北海道原住民の歴史に迫ろうと思えば、かなりの点で厳密な資料操作を行わなくてはならないのである。北海道の原住民つまりアイヌ民族は、古くから和人によって差別的に扱われてきたことは否めない事実であるし、その視点がこれらの記録の上に色濃く投影されていると見られるからである。文献資料や観察記録に、的確な資料操作を施すことの難しさがここにある。北海道における初期農耕の実態を把握する調査においても、古記録に描かれているアイヌ民族に関する記事がどのくらい正確な事実を反映しているのか、注意深く検討しなくてはなるまい。

最近の形質人類学的な研究成果によれば、アイヌ民族を構成する大部分の人間集団は、寒冷地適応を経過した北方モンゴロイド群とは考えられず、いわゆる古モンゴロイド群の一員で、しかも、日本列島に広く分布していたほぼ均質な縄文人と密接な関係を持っていたことが判明している⁽¹⁾。少し短絡的に表現すれば、アイヌ人は日本列島の中では比較的原集団の面影が他の集団によって変質されることなく続いた伝統的な群といえようか。こうした形質人類学的な見解は、北海道が縄文文化の北端の地であること、それ以降においても本州と密接な関連を持って文化が推移し、決して極東大陸の諸文化に席卷されてしまうことがなかった、という考古学的な資料ともよい整合性を見せる⁽²⁾。

II 農耕あるいは栽培植物の出現時期について

最近の日本考古学の一般的見解からすれば、この列島においては縄文時代前期に若干の栽培植物があらわれ⁽³⁾、縄文時代後期になると局地的には稲栽培の痕跡さえもが認め

られるようになる⁽⁴⁾。しかし、大多数の考古学者の間にみられる理解としては、縄文時代の植物栽培活動は、きわめて補助的なものであって社会を変革させる生業までには至らなかった、と考える傾向が強い⁽⁵⁾。つまりこうした変革は、弥生文化の特徴である稲栽培が本格化してからのこととされている。したがって、北海道を除く日本各地においては、いわゆる弥生文化開始以降に“農耕社会”がいろいろな形で発展し、現在に至ったと説明されることが多い⁽⁶⁾。こうした視点に立つかぎり、藤本強氏の主張するように、北海道はそのおかれている地理的環境の故に、本州の経過とは軌を一にしない。いいかえるなら、日本列島の北端に位置する北海道は、竹も茶の木も育たないきわめて冷涼な気候が支配的な地域で⁽⁷⁾、技術が未発達段階には農耕が一般化する可能性が少なく、もし農耕技術が存在していても、小規模かつマイナーなものであると信じられているようである。だから、北海道に農耕が定着するのはずっと新しく、真の意味での農耕・牧畜を主とした社会が成立するのは、明治時代以後のことであるという⁽⁸⁾。また、同時にこの視点は、中世～近代のアイヌ民族についての一般的な理解、つまり、彼らは主として採集狩猟に生活の基礎を持ち、その生業形態は古からの伝統あるいは残存であるとする見解を、強く支持するようにみえる。したがって、北海道における縄文時代の農耕を論議することなどは全く論外、農耕関係の資料が急増する西暦8世紀以降の擦文文化についてさえも、限られた地域に限られた規模の農耕があった、という評価しか与えられていないのである。繰り返すが、こうした認識は、和人とのコンタクト・ステージ⁽⁹⁾以降のアイヌ民族の生業認識にうまく整合するようにみられ、定説として常識化しているといつてよいだろう。

一般的に認められているこのような理解の下で、北海道における古代の農耕または栽培植物出現の時期を検討しようとするれば、次のような出発点が用意されるであろう。

(1) アイヌ民族はアワ・ヒエ・キビ・ムギ・ソバ・マメなどのきわめて粗放な農業を持っていた。文献記録では、1710年(宝永7年)松宮観山が著わした『蝦夷談筆記』に蝦夷地における畑作の記事が見えるのが最初である。はっきりと栽培植物の種類がわかるものは、1715年(正徳5年)の『松前志摩守蝦夷風俗書上』で、この中に北海道西南部に居住するアイヌが、アワを作っていた事についての記事が見られる。

また、659年の『日本書紀』(斉明5年)7月戊寅の条には、遣唐使が蝦夷人の男女を同道して唐の天子に見せるといふ記事がある。その折の天使の質問に対して「蝦夷に五穀なく肉食である」旨答えている。この資料に基づき、おおかたの歴史書では7世紀中葉以前には、いわゆる蝦夷は採集狩猟民であって穀物栽培は認められない、と記述しているものが多い。こうした事情から、アイヌ民族に見られる農耕は、きわめて粗放かつマイナーな存在であるが、18世紀には確実に存在が認められ、7世紀以前には多分存在していなかっただろうと理解されていた。こうした文献資料と考古学的資料の関連はどうなるのか。

(2) 出土資料ではどうか。まず、1952年に札幌西高校考古学研究部の手で10世紀代に位置づけられる擦文時代の火災を受けた竪穴住居中から、アワ・ソバ・緑豆などが鉄製鋤先と共に発掘され、注目されていた⁽¹⁰⁾。実際にはこれらの種子については同定の誤りがあり、出土資料はキビ・ベニバナとマメの一種であったのだが⁽¹¹⁾、擦文時代に雑穀が食用とされていた事を明確にした、最初の資料として意義深い。これ以降、断続的に雑穀種子の存在がいくつかの擦文時代遺跡から知られるようになる⁽¹²⁾。これら種子資料をどのように評価するか。

(3) 擦文時代の住居構造は、穀類の煮沸設備—カマドを意味する—を持つ本州の農耕文化の所産である土師器住居と殆ど同一の形態となる(第2図)。この現象は、本州の農耕文化の影響が擦文文化人の食物や調理技術にも強くあらわれ、変化が起きたと説明するのがもっとも的を得ているのではないかと考えられる事⁽¹³⁾。調理技術のみならず家屋構造まで変えてしまった影響の評価。

(4) 擦文文化にはほぼ並行して存在していたオホーツク文化の遺跡においては、竪穴住居の内部から多数の獣骨集積が発見される事があるが⁽¹⁴⁾、擦文文化の竪穴住居からそのような集積が発見された例はまだ無い。同様に、オホーツク文化の遺跡においては、住居内貝塚も含めて明瞭な貝層を持つ貝塚が発見されるが、擦文文化の遺跡においては、貝塚の発見は例外的でさえある⁽¹⁵⁾。オホーツク文化の遺跡の分布する地帯にも擦文文化の遺跡が隣接あるいは重複して見出される場合があるから、これらの違いを遺跡が埋没している地層の保存条件の差に帰する事は出来ない。このような遺物発見状況の相違をどのように説明するか。

(5) (1)で扱ったような歴史記録があるにもかかわらず、しばしばアイヌ民族は採集狩猟民であると認識されがちであった。そうした認識があらわれた理由もしくは背景の考察。あるいは、擦文文化～アイヌ文化に見られる農耕の持つ意味の検討。

これらの諸条件のうち、(1)に述べた文献資料の解釈はさておき、(2)～(4)の現象をもっともよく説明できる考古学上の仮説を用意しなくてはなるまい。そのためにはまず次のような作業が必要になろう。

(A) 今まで見逃していた可能性のある資料を検出するための発掘技術もしくはプロセスの検討。これはごく最近出版された北海道と南島に関する考古学的歴史展開の概説書を見てもわかるのだが、こと北海道の擦文文化に関する限り、発掘で検出される遺物はきわめて限られており、通常は土器と紡錘車が比較的多く出土するのと若干の鉄製の器具があるだけ、といった状態である⁽¹⁷⁾。つまり、今迄の発掘結果からすれば、具体的に擦文文化人の生業を物語る資料にはきわめて乏しい。にもかかわらず、遺跡の立地が河川に近接する低位段丘あるいは微高地上に位置するという現象をとりあげ、これを近世～近代のアイヌ集落のイメージとだぶらせ、擦文人の生業を河川漁依存型と理解してしまう⁽¹⁸⁾。そうした生業のあり方が考古学的に証明できるかどうか。

(B) 擦文時代の遺跡から知られている各種の栽培植物の由来・系譜の追及。北海道では、いつから農耕が開始され、どのような栽培植物が存在していたのだろうか。

III 炭化植物種子の検出

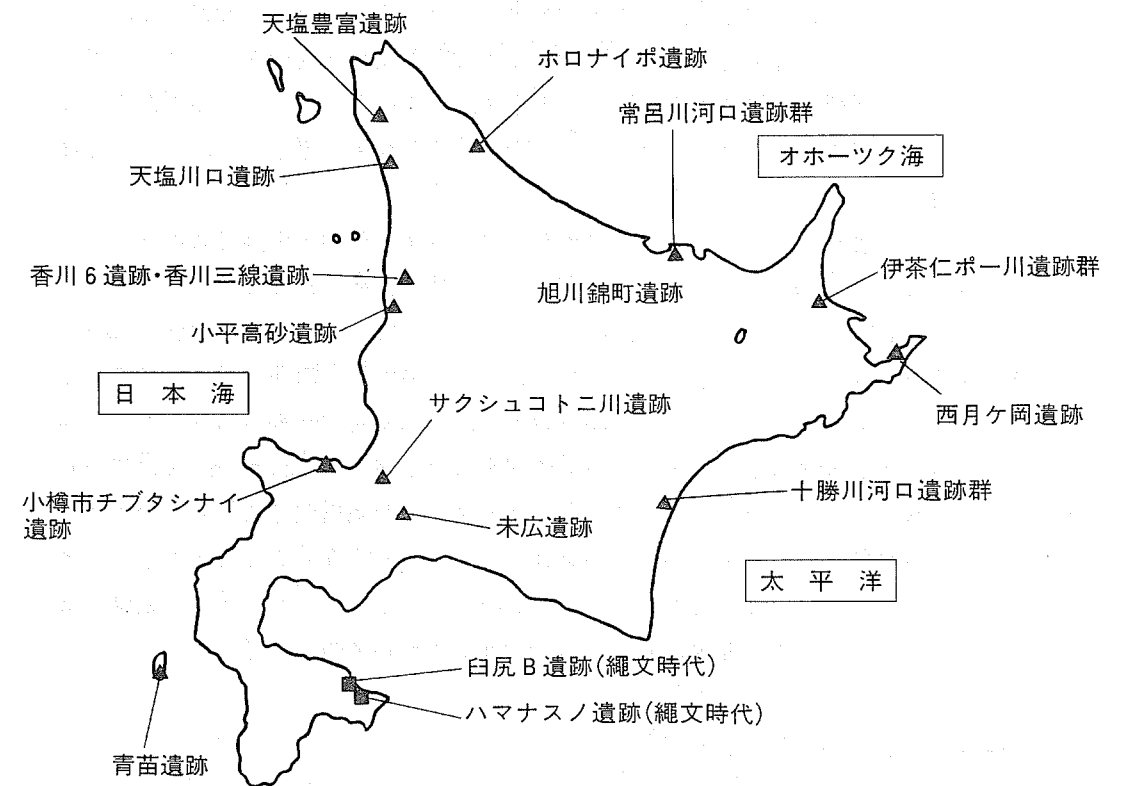
前述したように、擦文文化の遺跡においては、カマドや焼土の中に細片となって含まれる魚骨や小動物のほかには、食料に関する遺物の検出例が意外に少ないという一般的な認識がある。たとえば、緻密な観察で著名な大井晴男氏でさえも、「つまり擦文文化を支えていた経済的な基盤は、現在まで確証はないが、陸獣を主とし海獣を含む狩猟および鮭鱒を主体とする漁撈であったかと思われる。おそらく、その内容は、いわゆるアイヌ文化の場合にきわめて近いものであったろう⁽¹⁹⁾」と述べているほどなのである。擦文文化の遺跡の発掘例が極端に少ないのならともかく、この20年間に実施された集落規模の発掘は、15か所を越している。その結果が上記の結論なのである。他の文化、他の時期の遺跡の発掘調査からは、それ相応の食物遺残が検出されているのに、擦文文化の遺跡だけがそうした情報に乏しい。通常は、ごく少量の鳥獣類や魚の骨片と炭化した堅果類しか報告されていない。この出土資料が、擦文文化人の食料情報についての正確な反映を示すものであれば問題はない。しかし、発掘調査という作業には、移植ゴテや竹ベラで土壌を少しずつ削り取っていく、一見、原始的な手法が普通にとられているのである。こうした伝統的な手法でも、発掘作業のベテラン達にとっては、炭化した堅果類を発見することなど、さほど困難ではない。だが、もしアワやヒエのような径2mm未満の小さな雑穀種子が炭化して土中に混ざっているとすると、状況は異なってくる。砂礫や他の夾雑物の中に散らばっているこうした微細な資料を発掘の過程で拾い上げることの難しさは、想像を絶する。おそらくこの種の資料は、まとめて容器にでも入って見つかるか、よほど大量に固まって出土でもしないかぎり、肉眼だけで検出することは、不可能にちかいのではないか。こうした一般的な発掘調査の現実を考慮すれば、現時点で我々の手にできる食料源についての初期情報は、まだまだ偏りがあり、量的にも不足している可能性は否定できないだろう。さらに、種子同定の精度も問題となる。たとえば、1974年に長野県荒神山遺跡から検出され、縄文時代中期に属するアワと同定された資料が、後に走査電子顕微鏡による精査で否定され、エゴマとして再同定されたことは⁽²⁰⁾まだ記憶に新しいのである。

IV 出土炭化植物種子から見た農耕痕跡の検出

北海道では、1974年から南茅部町教育委員会小笠原忠久氏、トロント大学人類学部 Gary W. Crawford 氏と筆者らが共同してプロジェクトをくみ、手始めに北海道南茅

部郡南茅部町一帯の縄文時代遺跡において、炭化した植物性遺存体の積極的な検出作業を実施した。1984年からは、その他の諸地域および年代のものについても調査を開始、この作業は現在でも続行している。1988年からは調査活動を強化するために各地の考古学研究者に植物学者を加えて「Project SEEDS」が組織されるに至った。一連の活動が従前の発掘調査と異なるところは、遺跡の土壌から微細な炭化種子を検出するために大規模かつ積極的にフローテーション法を導入したことにある。フローテーション法とは、半乾燥の土壌を水中で攪拌し、その結果水面に浮き上がってきた炭化植物の薄片を、あらかじめ決められているメッシュサイズの数種類のスクリーンでこしとり、それを顕微鏡下で選別する方法である。したがって、炭化している微細な種子や草本破片を、容易に検出できるのである。この手法を実施してみると、これまでの発掘調査ではあまり注意をひかずに処理されがちであった土壌の中から、炭化した植物遺存体がかなり容易に採集できること、なかには食用植物の種子や自然環境の指標になり得るような資料が含まれることが判明した。

その一つ、南茅部町教育委員会の小笠原忠久氏を主任とする調査班が、1986年に発掘した渡島管内南茅部町白尻B遺跡⁽²¹⁾の資料をとりあげよう。この発掘では、縄文時代中期の竪穴住居の炉のそばから、炭化物のこびりついた土器片が見付かり、これに付着



第1図 遺跡位置図

して、アワ (*Setaria italica* (L.) P. Beauv.) とみられるものと、ヒエまたはイヌビエ (*Echinochloa utilis* Ohwi et Ybumo またはイヌビエ *Echinochloa crus-galli* Beauv.) が検出されたのである⁽²²⁾。アワは内外穎が失われた状態、つまり穎果のみが2個みつかった。同住居址の床面土壌を調査したGary Crawford氏は、ほかに同種のアワを7個検出しているから⁽²³⁾、現時点では9個の標本が入手されている事になる。内外穎が遺存しているともっと的確な同定が可能であるが、穎果の形態から見てアワと同定して誤りなさそうである(図版1)。ヒエまたはイヌビエは、内外穎をもったままのものと同定されている。この資料は、形態的に現生のヒエとは若干異なる。しかし、野生イヌビエに比べて、粒径サイズも大きい。また、資料が少ないので、植物分類学的にヒエかイヌビエかについての決定は、明確にしないほうが良いのかもしれないが、むしろ栽培ヒエにちかい。しかし、遺跡から検出されるこの種のヒエ属種子については、出土状態に注目する必要がある。それは、白尻遺跡に近接する渡島管内南茅部町ハマナス野遺跡の発掘の際に、縄文時代前期末の竪穴住居の埋積廃棄堆積物や生活面などから、ヒエ属種子の穎果が内外穎なしに集中して発見されていることである⁽²⁴⁾。この出土状態は、明らかに、この住人がヒエ属種子を利用していたことを証明するものだと考えさせる。しかも、Crawford氏は、この地域の遺跡から出土するイヌビエ種子について、次のような興味ある観察を報告しているのである。すなわち、ハマナス野遺跡と白尻遺跡においては、より古い縄文時代前期初頭の時期から同縄文時代前期末にかけて、出土するこの種のヒエ属種子の粒径が20%程増大する傾向が認められるというのである。氏は、この粒径増大現象について、栽培化による変化として解釈できるのではないかと疑っている⁽²⁵⁾。

藪野友三郎氏によれば、ゲノム分析の結果からみて日本・韓国・中国で栽培されているヒエ (*Echinochloa utilis*) は東アジア起源のものであり、その祖先種はあきらかにイヌビエ (*Echinochloa crus-galli*) であるという⁽²⁶⁾。だから、日本のヒエ栽培の伝統が、古く縄文時代から存在していたとするなら、これがイネの伝播に伴ってきたものでないことは明らかである。したがって、北海道渡島半島の縄文時代前期の諸資料と、今回新しく発見された白尻B遺跡の種子についての解釈は、前述のCrawford氏仮説が妥当であろうと考えざるをえない。つまり、我々はイヌビエが栽培化されていく過程の一側面をみているのだという考え方が、この場合、もっとも説得性のある説明と思われるのである。もし、藪野友三郎・阪本寧男両氏が指摘しているように⁽²⁷⁾、ヒエの起源が東アジアであるとする、この仮説の成立する可能性はきわめて強いと考えたい。

V 縄文文化理解の新しい視点

今まで述べてきたように、古代北海道の栽培植物あるいは農耕痕跡の存在が予想外な

展開を見せるとするならば、後の各時代の農耕の系譜をたどるうえにも、異なったアプローチを必要とするだろう。その一つとして、北海道渡島管内ハマナス野遺跡第27号住居を埋積する土器片堆積層と床面との炭化有機物を大量に含むX層から検出された炭化ソバ種子 (*Fagopyrum esculentum* Moench)⁽²⁸⁾も重要な意味を持つだろう。この種子の同定に関しては、現物を調べた山田悟郎氏が確認しており、出土状態については現場に筆者が立ち会っていた。しかし、縄文時代の農耕に否定的な考古学者の間では、十分な検討を行なわないで疑問視する傾向があった⁽²⁹⁾。

しかし縄文時代のソバ栽培に関する資料については、近年注目されべき資料が急増している。塚田松男氏らの西日本の宇生賀湿原の調査では、6600B.P.に比定できる地層から焼畑耕作を伴ったと思われる状況下でソバ花粉の検出が報告されている⁽³⁰⁾。また、安田喜憲氏によれば、富山湾に面する十二町湯遺跡からは縄文時代前期の層準からフツソバの花粉が検出されている。ここでも多量の炭片が検出されているので、森林破壊を伴う農耕が実施されていたらしい⁽³¹⁾。縄文時代後・晩期になるとほかにもソバ花粉の検出例が増加する⁽³²⁾。北海道においても同様である⁽³³⁾。こうしたソバ栽培の資料を見るかぎり、ハマナス野遺跡のソバ種子を否定する理由はない。したがって、地域的には多少の偏りがあるかもしれないが、日本列島の各地では、すくなくとも縄文時代前期にはソバ栽培が開始されていたと見るべきであろう。この仮説が正しいとすれば、問題はソバ栽培だけにとどまらない。福井県鳥浜貝塚の例⁽³⁴⁾からしても、マメの一種、ヒョウタン、ウリ類、シソ・エゴマ、ゴボウ、アサなどが縄文時代の栽培植物として追加されるだろうし、さらに、前述した渡島管内の諸遺跡の種子分析から存在が推定されているアワ、ヒエがこれに加わるはずである。こうした栽培植物のリストからすれば、新しい方法による調査が行き届いていない北海道東部地域を除き、おそらく縄文時代前期以降の日本列島各地は、すでに佐々木高明氏らの提唱するいわゆる「原初的あるいは初期的農耕」⁽³⁵⁾の段階に入っていたと考えるべきなのであろう。また、他方では関東地方に分布する大貝塚地帯や三陸の貝塚地帯および広大な気水域に面する明らかな漁撈集落遺跡などは、縄文時代としてはむしろ若干特殊な地域、あるいは生業圏であった可能性も考えてみる必要がありはしないだろうか。木の実貯蔵ピットについても、その存在が即ナツコレクターとしての証明になるかどうか、再検討しなくてはなるまい。弥生時代の集落からも同種のピットが検出されている事でもあるし、縄文時代人の補完的な食料ストックである可能性もあろう。

昔から言古されている縄文農耕「伝説」は、こうして縄文雑穀の出現によって、再検討の時期にきているように考えられる。たとえば、縄文文化前期～中期にかけて東北から北海道中央部近くまで広がっていた円筒土器文化やこれに並行する諸文化の遺跡は、集落の立地や規模、集落の中に出現する大型住居、大量の石皿・磨石、大量の土器の存在などから、きわめて安定した生活を送っていたかのようにみえる。こうした状況が、

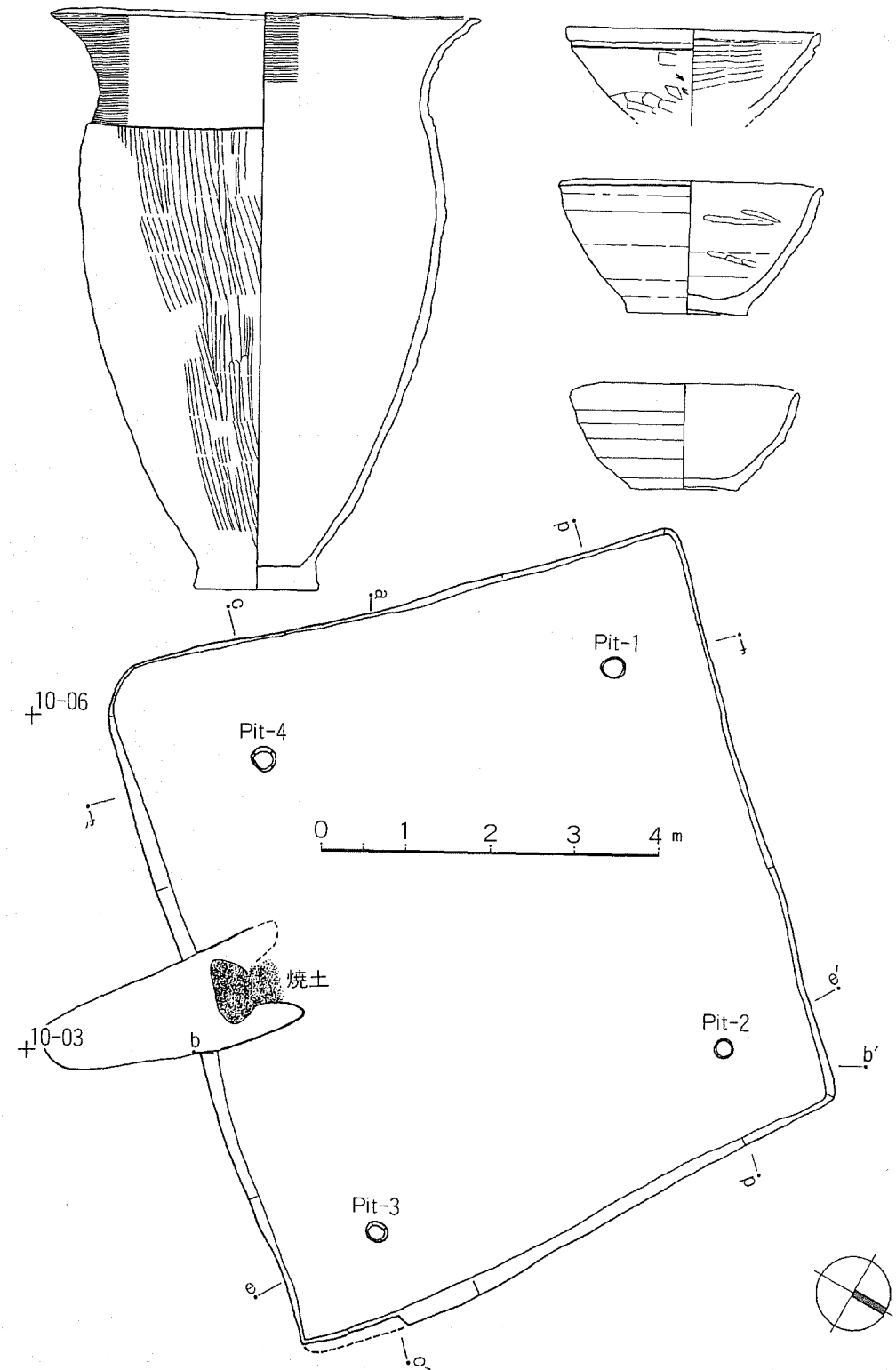
今まで述べてきたような“ある種の農耕”を背景に成立していたとすれば、豊富な天然の動植物資源、なかでも大量に川をさかのぼってくるサケ科の魚を中心として彼らの生活の基盤が支えられていたとするより、はるかに説明が容易なのは言うまでもない。また、東日本の縄文文化の中で、ヒエの馴化経過が認められる可能性のある事、さらに、縄文時代の人口は、西よりも東の方がはるかに卓越していた事⁽³⁶⁾などから、縄文農耕活動は、新しい時代に見られる稲作のような西日本から東日本、さらに北海道へという伝播モデルを必ずしも考慮しなくても可能であろうと指摘しておきたい。民族学者佐々木高明氏によって提出された縄文農耕仮説⁽³⁷⁾についても、考古学の立場から早急に返答すべき時期にきているように筆者には思われるのである。

VI 大量に出土する平安時代の炭化雑穀種子

北海道において、縄文時代に後続するいわゆる続縄文時代に関連する栽培植物についての調査は、まだ開始されたばかりで良好な資料に乏しい。筆者の知るかぎり種子資料は、石狩管内江別市江別太遺跡からアサとゴボウ⁽³⁸⁾、石狩管内札幌市K135遺跡からはオオムギが報告されている⁽³⁹⁾。花粉分析資料では、山田悟郎氏によってソバ属花粉が檜山管内奥尻町東風泊遺跡、胆振管内白老町アヨロ遺跡、同苫小牧市タブコブ遺跡、渡島管内上磯町下添山遺跡、石狩管内江別市西野幌1、旧豊平川河畔、元江別1の諸遺跡から検出されている⁽⁴⁰⁾。

西暦8世紀になると、本州からの強い影響下に擦文文化、筆者の仮称するエゾ文化⁽⁴¹⁾が成立する。これ以降、擦文文化(エゾ文化擦文期)が終わる鎌倉時代初頭までにかけては、花粉資料もさることながら、栽培種の炭化植物種子の発見例が急増する。

フローテーション法によるこの時代の植物種子の積極的な採集作業は、石狩管内札幌市サクシュコトニ川遺跡で最初に実施されている⁽⁴²⁾。この遺跡では、擦文時代の文化層が無遺物の砂質粘土層を挟んで、上下2枚発掘された。下層の文化層からは、竪穴住居5軒と多数の屋外焼土痕跡ならびに炭化物の集中地点が検出された。この層準の考古学的分析では、同時に存在した住居数は4軒であるが、残り1軒をも含めて同一土器型式内での集落があったと解釈されている⁽⁴³⁾。この文化層の炭化物集中地点や焼土の中から、大量の炭化植物種子がフローテーション作業で検出された。まだ未検討のサンプルが若干残されているので最終的な数字ではないが、1986年の報告作成時までに判明していた出土種子の総数は116,422個、うち栽培植物種子が114,666個含まれていた。栽培植物でもっとも多かったのはアワ (*Setaria italica* (L.) P. Beauv.) で61,600個、ついでキビ (*Panicum miliaceum* L.) が34,037個とずば抜けて多い。これに続きオオムギ (*Hordeum vulgare* L.) 11,443個、コムギ (*Triticum aestivum* L.) 4108個、ヒエ (*Echinochloa utilis* Ohwi et Ybuno) 106個、ほかに少量ずつであるが豆類 (*Vigna*



第2図 札幌サクシュコトニ川遺跡のカマド付5号住居と出土した土器(擦文時代)

第1表 留萌管内(香川6遺跡)1987年度発掘で判明した遺跡に関係した雑穀の分布(擦文時代)

遺構名	Setaria アワ (粒)	Panicum キビ (粒)	Unident. millet (粒)	Hordeum オオムギ (粒)	Perilla シソ属 (粒)	Chenopodium アカザ属 (粒)	Samolus ニワトコ属 (粒)	Polygonum タデ属 (粒)	不明	炭化材 (g)	骨片 (g)	浮游物 (g)	フローテーション サンプル (ℓ)
H-1 カマド	24	23	22							12.33		13.06	3.0
H-1 床面中央	8	1	10							69.45		119.48	3.0
H-2 カマド 上										6.40		6.40	1.5
H-3 カマド		3	1							16.30	0.20	17.39	3.0
H-4 貯蔵 穴										10.00		10.00	2.5
H-5 炉						2				6.86		7.12	2.5
H-6 カマド 上		3						2		6.10		6.70	1.5
H-7 カマド										0.08	0.08	0.56	1.0
H-7 土器 内										1.70		1.70	1.0
H-8 柱 穴	3	2	1							9.20	0.06	9.36	2.0
H-9 貯蔵 穴		1						3		30.07	0.02	33.37	3.0
H-10 カマド右脇			2					1		7.89	0.02	9.82	3.0
H-11 床 面										7.35	0.02	7.80	1.0
H-12 貯蔵 穴		22	6					2		9.20		9.45	2.0
H-12 カマド	23	11	8							12.93	0.27	13.69	1.5
H-13 カマド	11	9	15							6.49		11.36	2.5
H-14 炉の 灰			1							1.96	0.08	2.48	2.0
H-15 カマド 上										11.00	0.02	11.23	1.0
H-16 カマド		6								4.36	0.61	5.28	2.5
H-17 貯蔵 穴				1						40.30		40.30	3.0
H-18 炉	5	4	13					7		17.47	0.23	18.36	1.5
H-19 カマド			2							1.36	0.02	1.45	1.0
H-20 カマド		1	2							0.88	0.62	17.43	2.0
H-21 貯蔵 穴								1		16.00		16.00	2.5
H-22 カマド										14.67	0.07	15.50	2.0
H-23 カマド								2		0.31	0.05	2.97	1.5
H-24 カマド		2	3							1.90	0.02	12.47	2.5
H-25 貯蔵 穴		1	2					2		42.20		42.30	3.0
P-1 覆 土										12.56		12.56	1.5
焼 土 16			2					5		0.72	0.10	8.64	2.0
焼 土 18	1		1		2			1	5	0.26	0.25	2.80	1.5
焼 土 23												1.69	1.5
焼 土 24										0.28		1.49	1.5
焼 土 25			4					1	3			1.82	1.5
合 計	75	89	95	1	2	2	1	1	33	378.58	2.74	492.03	68.0

■Unident. millet: milletであるが種子の破損がひどく種の同定が困難であったものを一括した。

■浮游物: フローテーションで浮游した遺物の総重量。

sp.)、シソ属 (*Perilla frutescens*)、ウリ (*Cucumis mero*)、コメ (*Oryza sativa var. japonicum*) アサ (*Cannabis sativum*) が検出されている⁽⁴⁴⁾ (図版1)。

サクシュコトニ川遺跡下層文化層(報告書では第2文化層)資料の検討中に判明してきたもう一つの重要な所見がある。それは大量のコムギ・オオムギの炭化した小穂 *rachis* が確認されたことであろう⁽⁴⁵⁾。この小穂の検討作業はまだ終了したわけではないので、詳細については後日に譲るが、小穂は集落の竪穴住居外に見出された焼土を含む炭化物集中域の一地点に偏って検出されている。この事実は、集落内における古代人の作業域を確認できる重要な所見であろう。また、ムギの脱穀作業過程を復元する上にも、興味深い資料であろうと考えられる。

サクシュコトニ川遺跡においては、もう一つ彼らの食料獲得戦略を物語る重要な資料が発見されている。それは集落の脇に幅15m程の埋没河川が確認され、その中にサケ科の産卵遡上魚を捕獲するためトメ (fish trap) の構築が確認されたことである⁽⁴⁶⁾。この施設は上下文化層のいずれに属するのかは決定できなかったが、この人間集団にとっては、動物蛋白の重要な獲得装置であったにちがいない。彼らのこの食料戦略の成功を物語るかのように、焼土と炭化物集中地点にたいして徹底的に実施されたフローテーション作業の残渣から、総数6000個あまりのサケ科魚類の遊離歯が検出されている⁽⁴⁷⁾。これらの歯の部位についての詳細な検討を無視して、歯の総数を用いて単純な計算を行なうと、体長6~70cmのサケ50~80尾ほどの量となる。かりに、この程度の小河川に通常見られるサケ遡上数と資源を消滅させない捕獲量を考慮して、前述の推定尾数の5倍~10倍の尾数が当時の年間のサケ捕獲数だとすれば、この村の住人にたいする蛋白供給源としてはかなりウエイトを持つ⁽⁴⁸⁾。興味深いことに、この遺跡からは、これ以外の魚骨はきわめて少量、さらに哺乳動物にいたってはウサギとシカの骨の断片が検出されただけで、他種の骨片はほとんど見られなかったことだ⁽⁴⁹⁾。堅果類も殆ど検出されていない。したがってサクシュコトニ川遺跡で復元できる当時の生活の基礎は、出土資料に基づくかぎり農耕主体のものであった、と判断せざるをえない。ほかには説明の方法がないのである。

では、こうした現象は、擦文時代の遺跡の中でサクシュコトニ川遺跡にのみ見られる特殊性であったのだろうか。現在までにフローテーション作業が実施され、我々がその植物遺存体の検討にかかわった遺跡についてみれば、こうした現象は、むしろ普遍的であるらしい。例えば、留萌管内苫前町香川6遺跡においては、第1表に示すように、25軒の擦文時代住居が発掘されているのであるが、そのすべてからアワ・キビを中心とする栽培植物種子が検出されている。しかも、それらの殆どは彼らの調理スペース、つまりカマド周辺からの出土である⁽⁵⁰⁾。魚骨や獣骨との関連もサクシュコトニ遺跡と大差はない。未報告ではあるが、石狩管内札幌市K36遺跡、同K441遺跡⁽⁵¹⁾、植物園内遺跡⁽⁵²⁾、恵庭町中島松5遺跡⁽⁵³⁾などの諸地点からもアワ・キビなどが検出されている。また、このほかにも、渡島管内松前町札前遺跡からはキビ・アワ・オオムギ・コメが⁽⁵⁴⁾、十勝管

内浦幌町若月遺跡からはキビとオオムギ⁽⁵⁵⁾、留萌管内小平町高砂遺跡からマメ⁽⁵⁶⁾、天塩管内豊富町豊富遺跡からはキビとベニバナなどが報告されている⁽⁵⁷⁾。これらは、いずれも確実な出土例である。根室管内西月ヶ岡遺跡においては、第120号住居からモロコシあるいはキビの出土が報ぜられているが⁽⁵⁸⁾、これがもし事実であるとすれば、現時点において最東端の資料となる。しかし、よほどの検討を得なければ、現地栽培のものであるかどうか、にわかには決定できない難点がある⁽⁵⁹⁾。こうして眺めてみると、少なくとも積極的に植物種子の検出に努めた遺跡においては、殆どの場合、栽培植物種子が発見されているように思われるのである。ところが、オホーツク海沿岸地域に分布するこの時期の遺跡からは、こうした報告例が今のところ無い⁽⁶⁰⁾。確かに、この地方の海岸地域は、夏期には濃霧が発生し日射量が少ない。こうした自然環境の状況が農作物の栽培に影響し、北海道の他地域に見られるような擦文農耕が成立していなかったとすれば、藤本強氏の説明するように⁽⁶¹⁾、河川や海での漁業や狩猟採集が彼らの基本的な生業であった可能性がある。もしこの見解が妥当であるとするならば、出発点で述べた(3)および(4)に関する問題を十分に説明する資料が必要ではないだろうか。その可能性も十分にあると筆者は信じて期待したい。ただ、この地域で積極的なフローテーション作業が実施されて、わずかばかりの栽培植物が検出されたとしても、そのことが直ちに筆者の仮説の正当性を証明する事にはならないだろうという事にも注意しておきたい。彼らが内陸部の農耕民ときわめてタイトに組み込まれていた生活を送っていたとすれば、別な説明がなされる事があり得るからである。しかしながら、そのような未解決な重要課題を残しているとしても、筆者は北海道の殆どの地域に広がった擦文文化の人間集団は、大多数の考古学研究者の言うような原初的農耕 (incipient agriculture)⁽⁶²⁾ なのではなく、いわゆる“農耕”として定義されるものであったという仮説を提示しておきたい。

VII 結語にかえて

北海道における栽培植物や農耕の探査が軌道に乗り始めてから、15年そこそこしかたっていない。したがって、まだ、各地域各時期にわたる詳細な調査結果を入手できるまでには至っていないのが現状である。調査データの不備も多い。だが、そうした制約をこえて我々の抱いている作業仮説を述べておくのも無駄ではあるまい。

北海道の西半部においては、農耕の出現は縄文時代前期と判断される。そこではソバ・アワ・ヒエ・シソ・マメなどが栽培されていた。当初には原初的農耕のレベルであったと思われるが、まもなく初期農耕のレベルにまでも到達していたのではないだろうか。それに、日本海を狭んで対岸の沿海州、中国東北部、朝鮮半島などの諸地域に新石器農耕が一般化している状況下では、自然環境が変異に富み、それ故に獲得採集出来る天然の食料が豊富である、という理由だけで日本列島がエアポケットになるのは、どう考

えても不自然のように思われる。こうした仮説を前提にする事によって、本稿では触れられなかったが、北海道の縄文時代前期から中期に見られる集落の形態や遺物、縄文後期の大型の周堤墓の存在など、考古学的資料の説明がしやすくなるは事実であろう⁽⁶³⁾。この状況は、東日本一帯についても一般的であったと推定される。ただ、西日本は若干異なった様相、つまり照葉樹林帯の生活に対する優れた適応、例えば東日本よりナッツ・コレクター的性格が強く、かつ、より長く原初的農耕段階に留まっていた可能性も否定できない⁽⁶⁴⁾。そのほか、いくつかの気水域や特定の海岸においては、特別な適応形態、漁村が発達していた可能性がある。最近実施されるようになった人骨の微量成分分析⁽⁶⁵⁾は、そうした特殊な地域の人間集団を偏って扱いがちになり、誤った全体像を与えてしまう危険性のある事も、否定出来ないのではないだろうか。

続縄文時代のいずれかの時期に、それまでの栽培植物のリストにオオムギが追加になった可能性が考えられる。この所見は、本州のデータ⁽⁶⁶⁾や大陸アジア側のデータ⁽⁶⁷⁾と矛盾しないかもしれない。

擦文文化の段階には、北海道の殆どの地域が農耕文化を所有していたであろう。従前説明されてきた考え方とは主体が逆転し、農耕作物が生活の基礎となり、狩猟採集は補助的だと考えたほうが良い。栽培植物としては、アワ・キビ・ヒエ・オオムギ・コムギ・ソバ・ウリ・マメなど、初期農耕に一般的な作物が出揃う。

本稿では触れられなかったが、こうして発展してきた北海道の農耕文化が、歴史時代になってから人為的な理由で衰退させられてしまった可能性が考えられている。この点に関しては、以前に基本的な仮説を述べた事があり⁽⁶⁸⁾、同種の考え方は、菊池徹夫氏も述べている⁽⁶⁹⁾。

以上の仮説が正しいとすれば、出発点の(1)で述べた文献に残る蝦夷の生活観察は記録はどのように解釈出来るだろうか。筆者は、現在の考古学資料によるかぎり、これらの記録が意図的差別蔑視の結果、発生した歴史記録や観察のねじ曲げではなかったかと考えたい。これらの記録は、あたかも前世紀の布教者達あるいは旅行家などの残した、いわゆる“未開人や未開地に関する報告、にしばしば見られるスタイルに強い類似性が認められるような気がしてならないのである⁽⁷⁰⁾。

要するに、北海道の縄文時代から認められる初期農耕は、稲作が東日本に侵入してくる以前から広がっていた原始的な雑穀農耕⁽⁷¹⁾、そのピークは擦文時代と考えられる。我々がアイヌ民族の伝統の中に痕跡的にする粗放農業は、そうした稲作以前の農耕伝統の残照ではなかったのだろうか……。

謝辞

この論稿をまとめるにあたって、University of Toronto の Gary W. Crawford 教授、南茅部町教育委員会小笠原忠久氏、北海道開拓記念館山田悟郎氏、大阪市立大学名誉教授薮野友三博士、国際日本文化研究センター埴原和郎教授、大阪市立博物館那須孝悌博士、北海道大学辻井

達一教授、同伊藤浩司教授、同林謙作助教授、走査電子顕微鏡によるチェックと整理作業を從事してくれた椿坂恭代氏、岡山理科大学小林博昭助教授および Project SEEDS の諸メンバー、快く資料の使用を許可された札幌市、南茅部町、恵庭町、苫前町、門別町、戸井町、教育委員会、北海道文化財研究所に御礼を申し上げます。

末筆ながら、鎌木義昌先生のお祝い申し上げます。また、これまで35年にもわたる御指導御鞭撻に対して御礼を申したいと思えます。本当に有り難うございました。

〔註〕

- (1) 埴原和郎「日本人頭骨形態の地域性」人類学会編『人類学—その多様な発展』1984年 pp. 78~87、山口敏「日本人の生成と時代的な推移」前掲書pp. 60~71
- (2) 吉崎昌一「北海道における地域性」岩波講座『日本考古学』第5巻 1984年 pp. 290~324
- (3) 安田喜憲「縄文時代の環境と生業」佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生』日本放送出版協会1988年 pp. 36~38、pp. 50~51。Tukada et al : Oldest primitive agriculture and vegetational environments in Japan. NATURE Vol.322 14 AUGUST, 1986, pp. 632~634. 吉崎昌一註(2) pp. 304~308
- (4) 藤原宏志「プラントオパール分析の基礎的研究(4)」『考古学と自然科学』14 1982年
- (5) 佐原 真『日本人の誕生』小学館 1987年 pp. 192~200。大部分の日本考古学者の考えであるように思う。
- (6) 藤本 強『もう二つの日本文化』[2]東京大学出版会 1988年 pp. 9~10
- (7) 畏友佐原真氏が北海道に来遊したおり、筆者に語った言葉。きわめて印象的なので紹介しておく。
- (8) 前出註(6) p. 11
- (9) 古墳時代以降に形成された本州和人の集団渡来は、北海道原住民に文化的・経済的に大きな影響をもたらす。今後、類似のモデルとして新大陸における西欧人とその土地の原住民の接触によって引き起こされた文化的経済的諸問題と、北海道に見られる状況を比較研究する必要がある。我々が入手出来る北海道の民族学的資料は、すべてコンタクト・ステージかそれ以後のものである事を認識しておく必要がある。もし民族学研究者が方法論的操作なしにコンタクト・ステージ以前の、つまり本州からの日本文化の影響下でない状況について報告しているとすれば、その研究成果はかなり批判的に見なくてはなるまい。
- (10) 河野広道「北海道出土の大型U字形鉄器について」『北海道学芸大学考古学研究会連絡誌』19
- (11) 偶然に筆者とGary W. Crawford氏が気付いた。正式の報告はないが『北方圏』1985年 Vol. 52に発見の顛末がCrawford氏によって述べられている。
- (12) 山田悟郎「北海道における先史時代の植物性食料について」『北海道考古学』第22輯 1986年 pp. 94~101

- (13) 桜井清彦「擦文文化に関する若干の問題」『史観』65~67号合冊、1962年 pp. 284~291
- (14) 前出註(6) pp. 44~46など
- (15) 筆者の知るもので、洞窟遺跡以外で現在までに知られている擦文文化主体の貝塚は檜山管内奥尻島青苗貝塚のみである
- (16) 前出註(6)
- (17) 前出註(6) pp. 41~43
- (18) いわゆるサイトキャッチメント・アナリシスなどでは、しばしばこうした結論になりがちである。筆者もそうした誤りを時々経験する。
- (19) 大井晴男「擦文文化といわゆる“アイヌ文化”との関係について」『北方文化研究』第15号 1984年 北海道大学北方文化研究施設 p. 56
- (20) 松谷暁子「走査電顕像による炭化種実の識別」古文化財総括班編『古文化財科学と人文・自然科学』1984年 pp. 634~636
- (21) 小笠原忠久『白尻B遺跡』Vol. VIII, 1988
- (22) 前出註(21) p. 143 に紹介がある。ただし写真その他は、この報告には未掲載。
- (23) 共同研究者 Gary Crawford 氏からの通信連絡による。
- (24) Gary W. Crawford『PAREOETHNOBOTANY OF THE KAMEDA PENINSULA JOMON』ANTHROPOLOGICAL PAPERS, MUSEUM OF ANTHROPOLOGY, UNIVERSITY OF MICHIGAN, No.73 1983年 p. 144
- (25) 前出註(24) p. 159
- (26) TOMOSABURO YABUNO「JAPANESE BARNYARD MILLET (*Echinochloa utilis*, Poaceae) IN JAPAN」Economic Botany 41(4) 1987年 New York, pp. 484~493
- (27) 前出註(26) p. 484, 坂本寧男『雑穀のきた道』NHKブックス 546 日本放送出版協会 1988年 pp. 170~171
- (28) 前出註(24) pp. 38~41
- (29) たとえば総合討論「縄文の畑作農耕とその検証の可能性をめぐって」佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生—縄文農耕論へのアプローチ』pp. 347~386の中での小林達雄氏の発言 p. 360は、余り気楽すぎはしまいか。氏の立場であれば、検証は容易であったはずである。
- (30) Tukada et al : Oldest primitive agriculture and vegetational environments in Japan. NATURE Vol.322 14 August 1986, pp. 632~633.
- (31) 安田喜憲「縄文時代の環境と生業」佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生』日本放送出版協会 1988年 p. 51
- (32) 前出註(31) p. 56
- (33) 山田悟郎「北海道における先史時代の植物性食料について」『北海道考古学』第22輯 1986年 pp. 96~97

- (34) 前出註(31) pp. 36~38
- (35) 佐々木高明「日本における畑作農耕の成立をめぐる」佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生』日本放送出版協会 1988年 pp. 15~20
- (36) 小山修三『縄文時代』中公新書 中央公論社 1984年
- (37) 前出註(35)。ただし、東日本の方が農耕が普遍的だったとしても、それがサハリンに定着後南下したとは限らない。沿海州から直接海路経由もあり得るし、サハリンは単に寄港地だった可能性もある。ソバのように本州日本海側を北上してくる可能性も捨て難い。今後の資料待ちであろう。
- (38) 矢野牧夫「石狩低地帯の先史遺跡から出土した植物遺体」『北海道開拓記念館年報』9号 1981年
- (39) ゲーリー・クロフォード「K135遺跡から検出された植物種子について」札幌市文化財調査報告書XXX『K135遺跡』1987年 札幌市教育委員会 p. 566
- (40) 前出註(33) pp. 95~96
- (41) 文化の諸伝統からいって、擦文文化と東北北部の古墳時代末期のものとを分離出来るかどうか。特に、擦文文化が雑穀農耕で、東北北部の大部分の地域が同様に雑穀農耕に生活の基盤を置いてたとすれば、それらを一括してエゾ文化と呼称する方法が考えられないだろうか。そのほうが形質人類学の結果ともよい整合性があるのではないか。エゾという呼称が新しいものとしても、律令政権に対抗して存在した蝦夷集団を念頭におけば、この命名はさしたる矛盾でもあるまい。つまり、水田稲作民の外側に居住し、古くからの雑穀農耕を基盤とし、長老支配のもとでの緩やかな政治組織下に一括される人間集団。この集団の保持していた文化を、エゾ文化と仮称すると“もう二つの日本文化”がよく見えるのではないだろうか。この問題については、いずれ稿を改めてふれたいと考えているが、吉崎昌一「考古学におけるエゾとエゾ地」『創造の世界』49号 1984年 小学館 pp. 80~97 で若干述べた事がある。
- (42) 北海道大学埋蔵文化財調査室編『サクシュコトニ川遺跡』北海道大学 1986年
- (43) 横山英介「サクシュコトニガワ遺跡の遺構」北海道大学埋蔵文化財調査室編『サクシュコトニ川遺跡』北海道大学 1986年 pp. 23~37
- (44) Gary W. Crawford「植物種子遺存体」北海道大学埋蔵文化財調査室編『サクシュコトニ川遺跡』北海道大学 1986年 pp. 143~160
- (45) 椿坂恭代「サクシュコトニ川遺跡出土植物遺存体の再検討資料」北海道大学埋蔵文化財調査室編『北大構内の遺跡』1988年度 in press. この種資料の出土する事が確かめられたので、今後もっと積極的に微細遺物の採集を実施する必要がある。注意を喚起しておきたい。
- (46) 前出(42) pp. 75~79
- (47) 高橋理「動物遺存体」北海道大学埋蔵文化財調査室編『サクシュコトニ川遺跡』北海道大学 1986年 pp. 135~142
- (48) シロザケの歯数はきわめて変異に富んでいる。ここで用いた1尾あたりの歯数は120本

であるが、実際にはもうすこし多いのが普通である。これらサケ関係の情報は札幌市豊平川サケ科学館の教示による。

- (49) 前出註(47) pp. 135~142
- (50) 吉崎昌一「苫前町香川6遺跡出土の植物種子」苫前町教育委員会編 苫前町文化財調査報告第2輯『香川6遺跡・香川三線遺跡』1988年 pp. 171~175, 184
- (51) 札幌市教育委員会の提供になる資料を調査した結果である。
- (52) 筆者の研究室で発掘調査。未報告。
- (53) 恵庭町教育委員会1988年発掘調査資料。
- (54) 矢野牧男「出土した植物遺体について」松前町教育委員会編『札前』1985年 pp. 303~306
- (55) 前出註(33) p. 95。松谷暁子「走査電顕像による炭化種実の識別」古文化財総括班編『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』1984年 p. 634
- (56) 前出註(33) p. 95
- (57) 前出註(10), (11)
- (58) 前出註(12) p. 95。初出文献は八幡一郎ほか『北海道根室の先史遺跡』根室市教育委員会 1966年
- (59) 他の地域から持ち込まれたかどうかの検討は、きわめて判断が難しい。脱穀のプロセスがどの程度認められるか、あるいは、調理のスペースで、どの程度の出土が確認出来るか、などが判断手法として有効である。
- (60) 存在しなかったのか、積極的にフローテーションが実施されていなかったのか、筆者には判断がつかぬ。ちなみに、北海道においては、フローテーションを発掘調査に導入している例はあまり多くない。今後期待されるところである。
- (61) 前出註(6) p. 67
- (62) 前出註(35) pp. 16~17。この中で佐々木高明氏が定義している概念は、考古学分野にとってきわめて有効である。今後この定義に従って作業を進行させたい。
- (63) この仮説については、以前に述べた事がある。例えば吉崎「北海道における地域性」岩波講座『日本考古学』第5巻 1984年 pp. 304~308
- (64) 小山修三「栽培のかたち」佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生』日本放送出版協会 1988年 pp. 279~287
- (65) 南川雅男・赤沢威「縄文人の食料摂取」『遺伝』1988年 Vol. 1 No. 10
- (66) 例えば、小山修三「縄文文化の成熟と植物栽培の意味」佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生』日本放送出版協会 1988年 p. 272
- (67) 佐々木高明編『日本農耕文化の源流』日本放送出版協会 1983年中の座談会におけるにみられる加藤晋平氏の発言 p. 152~153など
- (68) 乳井洋一編『シンポジウム アイヌ—その起源と文化形成』北大図書刊行会 1972年所収

の pp. 238~244における吉崎発言。吉崎昌一「香川三線遺跡と擦文文化」北海道苫前町教育委員会編『香川三線遺跡』 1987年 pp. 221~222

(69) 菊池徹夫「擦文文化の鉄器について」『北方考古学の研究』所収 六興出版 1984年 pp. 185~190。ただし初出は1979年『どるめん』誌上。

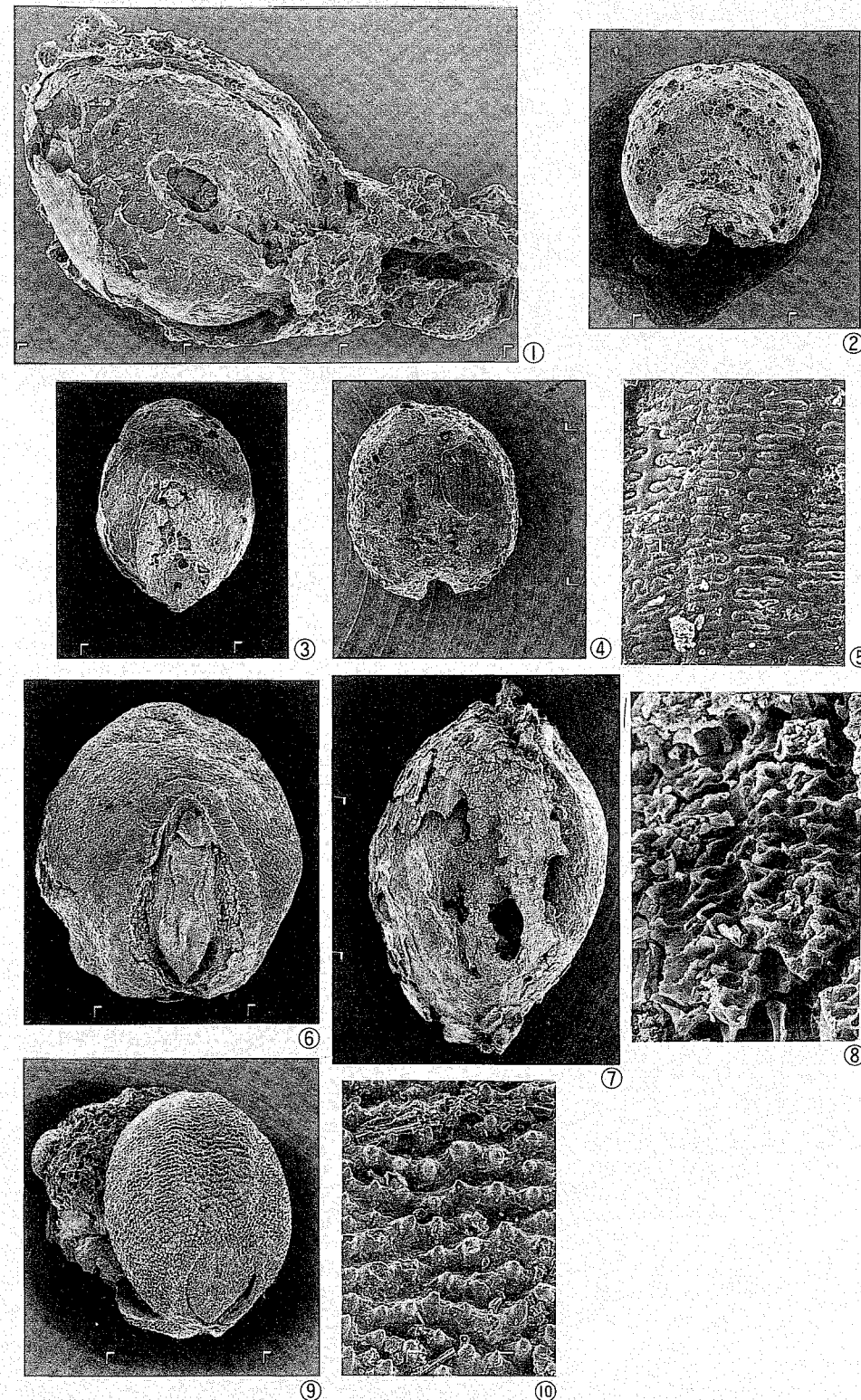
(70) ETHNOCENTRISM の典型例ではなかったのか。例えば1634年に出版された Sir Thoms Herbert のTravalle into Afrique and Asia. などを見ても同様な例が非常に多い。文化人類学研究者の間においては常識である。

(71) 今後東日本の雑穀農耕の諸階梯を徹底的に洗う必要がある。たとえば、縄文時代中期白尻B遺跡例のようにアワがあるならならば、大陸側(華北や東北部、あるいは沿海側など)において、既にアワとくみ合わさって栽培されていた重要な農耕作物の一つキビが日本で検出出来るかどうか問題となろう。筆者の手本には、中国東北部白神宝遺跡出土あるいはキビと思われる資料についての情報がある。しかし、中国、シベリア共に出土資料の同定が不十分で、確実な情報に乏しいように思われる。ご教示頂ければ幸いである。

(1988年11月23日稿了)

(1988年11月28日受理)

吉崎昌一：北海道大学 文学部 基礎文化論講座 (〒060 北海道札幌市北区北10条西7丁目)



図版説明

- 1：白尻B遺跡の縄文中期ヒエ属種子
 - 2：白尻B遺跡の縄文中期アワ
 - 3～4：札幌市K441(N-33)遺跡の擦文時代ヒエ
 - 5：4の内穎部分の長細胞組織
 - 6～7：サクシュコトニ川遺跡の擦文時代キビ
 - 8：7の内穎部分の長細胞組織
 - 9：サクシュコトニ川遺跡の擦文時代アワ
 - 10：9の外穎部分の乳頭突起
- 部分写真を除きスケール間隔は1mm